演劇写真の誕生と展開
-東京の役者、写真師、そしてメディア-

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2021-05-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 村島, 彩加
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21804

2021 年 1 月 26 日

「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員　（主査）　文学部　専任教授

氏名　神　山　　彰　　㊞

（副査）　文学部　専任教授

氏名　伊　藤　　真　紀　　㊞

（副査）　東京大学名誉教授

氏名　古 井 戸　　秀　夫　　㊞

１　論文提出者　　村島　彩加

２　論文題名　　演劇写真の誕生と展開―東京の役者、写真師、そしてメディア―

（英文題）　Birth and Development of Theatrical Photography
-The actors, photographers and media in Tokyo-

３　論文の構成

本論文は、時代的には、我が国への写真術伝来の 1848 年から、五代目尾上菊五郎追慕の写真集『五世尾上菊五郎』が刊行された 1935 年までを対象とし、序章、結章を含め、十五章から構成されている。

序章では本論文の問題意識、目的、先行研究について論じた上で、論文全体の基礎となる日本に於ける写真技術の変遷を示す。

以後、具体的にその変容を考察する。第１章「演劇写真のはじまり–演劇写真の撮影・販売の先駆者　内田九一とその周辺–」、第２章「役者絵と演劇写真–『魁写真鏡俳優画』と内田九一–」、第３章「散切物と写真–『勧善懲悪孝子誉』に見る北庭筑波–」、第４章「写真版権と演劇写真–塙芳野と九代目市川團十郎–」、第５章「上演と写真–森山写真館と五代目尾上菊五郎–」、第６章「演劇写真周辺の試み」までが、湿板写真の時代＝新富座が劇界の中心だった時代で、ここまでが、内容的にはひとつの区切りとなる。

第７章「『歌舞伎新報』と演劇写真–鹿島清兵衛と玄鹿館–」以降は、雑誌や絵葉書、写真集といった、明治 20 年代以降に登場する、不特定多数が享受した演劇写真メディアへと着眼点が移る。

第８章「絵葉書と素人」では、日露戦争（1904～05 年）と共に大流行した絵葉書と演劇写真の関連について、第９章「『演芸画報』誕生」では演劇グラフ雑誌の誕生の背景を検証している。

第 10 章「三越と演劇写真–流行と回顧–」は、そうしたメディアが進歩を見せた時代において、当時の文化・ライフスタイルを牽引し流行を生み出す拠点となっていた百貨店・三越が主催した

展観「劇に関する展覧会」（1915 年）で、幕末～明治初期の演劇写真が展示され、その歴史的価値が「発見」される契機となったことを示す。

第 11 章「七代目松本幸四郎の試み–西洋式メイクアップ研究と演劇写真–」、第 12 章「五代目中村歌右衛門の試み–狂気の演技と写真–」では、役者たちが個々に写真を用い、自身の演技を構築する手段として用いたことを論じ、同時に、幕末～明治 30 年代を牽引した九代目市川團十郎（1838～1903）、五代目尾上菊五郎（1844～1903）没後、新俳優が歌舞伎役者に伍して活躍の場を広げていった時代に、歌舞伎役者が演技を変化させていった過程を、演劇写真を通して検証している。

続く、第 13 章「死絵と写真集–安部豊の仕事–」においては、九代目團十郎、五代目菊五郎といった演劇写真の被写体の第一世代だった役者たちの写真が、没後に「写真集」という新たな形で追慕に用いられたことを、近代以前の役者の追慕・追善のために版行された浮世絵版画「死絵」を比較対象に論じることで、役者の肖像が「絵から写真へ」と変遷する過程を包括的に論じる。

最期の結章で、各章の簡潔に総括を行うと共に、演劇写真の展開に着目したことで、演劇史的に考察しうる重要な 3 点を指摘している。

以上が、本論文の構成である。

4　論文の概要

本論文は、演劇に関連する事物を被写体とする写真を「演劇写真」と総称し、それが撮影され始め、役者・観客に浸透し、メディアとして流通していく過程を明らかにすることを目的の一つとする。第二の目的として、従来はあまり着目されることのなかった演劇写真の撮影者に着目し、かれらが役者をはじめ劇界関係者とどのようなつながりを持ち、上演、演技についても影響を与えたことを論じている。

本論文では、演劇写真の、主に東京での歴史、撮影者の変遷、さらにメディアにおける利用の変遷を明らかにしている。演劇写真の歴史は、従来の演劇史では言及乏しく、ある場合も、主に流通形態の変遷（印画紙から製版画像へ）についての言及が中心で、江戸時代に浮世絵によって表現されてきた役者の姿が、写真画像へと変化していった過程を、発展史的に通観することが主流であった。本論文ではそれらの先行研究に、より詳細な写真技術の変遷史と、それに伴う撮影者の変化への着目という、新たな視点を加えた。

幕末から明治 20 年代までの我が国においては湿板写真術（コロジオン・プロセス、感光材で濡れた状態のガラス板を種板とする）が主流であり、撮影は専門的な知識と技術を持った写真師が行うことが通例であった。そのため、同時期には撮影者である写真師と役者をはじめとする劇界関係者が密接に関わることが多く、撮影者が作品に取り上げられることもあった。

更に、本論文では従来等閑視されていた役者と撮影者の関係、撮影者と作品との関わりを、具体的な事例を挙げて指摘している。また明治 20 年代以降は、簡易に撮影が可能となる「乾板（感光材が付され、乾いた状態になっているガラス板）」が用いられるようになり、素人でも撮影が可能になることにより、撮影者の変遷と共に、被写体となる役者の、写真に対する意識や価値観も変化したのである。

また、雑誌や広告媒体にも写真が用いられる時代となり、その流通の変化にも着目し、百貨店で「展示」されるなど、生活のなかにも入り込む、メディアとの関連も多く論じている。

更に七代目松本幸四郎（1870～1949）、五代目中村歌右衛門（1865～1940）のように、みずか

ら積極的に撮影に関わり、演劇写真を参照することで新たな演技を模索する者も現れた。本論文では、従来の演劇史における演劇写真への言及においては看過されてきた、役者の演技と写真との有機的な関わりについても言及している。

５　論文の特質

本論文の特質としては、まず、結章で指摘されている、以下の三点を、強調しておきたい。

（１）従来着目されることの少なかった演劇写真とその撮影者に着目することで、従来の演劇史研究で看過されてきた劇界を取り巻く人物とその影響を見出すことができる。つまり、従来の演劇史に新たな視座を提供したこと。

（２）従来の文学・演劇史において作家・評論家として扱われてきた人物（おもに第８・９章における山岸荷葉、川尻清潭、安部豊）に、演劇写真撮影者としての新たな経歴を見出し、再評価したこと。

（３）各優がどのように写真に対峙してきたかを検証し、近代日本演劇史において重要な資料である芸談と関連させて論じることで、各優の演技観や演技に関係を与えた、従来看過されてきた劇界以外の人脈の存在などを確認したこと。

それに加えて、以下のような点を、特質として指摘できる。

本論文の特質は、その劇場の観客の欲望と快楽の根拠を問うことによって、従来見過ごされてきた演劇研究の重要な部分を埋めることに寄与している。

そして、観客の期待は、観客個々人の内部で自発的に生成されるものではない。それは、江戸時代には、浮世絵の役者絵の極彩色のイメージを通して生じていた。その変換が訪れるのが、19世紀末の近代、明治時代だった。それが、本論文で扱うテーマである、写真による視覚装置の変換である。近代では、観客は、写真の強烈なイメージによって、劇場に、演劇の現場に導かれるのである俳優もそれに応じて、従来の観客とは別個の視点を感じる。本論文で詳しく言及される、従来にない表情術の導入もそれに対応している、

また、写真の大きな機能は、上演の「記録」だった。しかし、直ぐに、写真を先行させ、それに順じて舞台を作るという逆転が生じる。

以上簡単に見たが、本論文の特質は、演劇写真の発生からその性質の転換を通して、広く多面的に近代文化のイメージ受容の転換にまで及んでいるところにある。

６　論文の評価

演劇の研究は、矛盾を孕んでいる。観客は劇場へ、眼と耳から得る視覚的、聴覚的快楽を求めて訪れ、その期待を充たし、あるいは、その期待に裏切られる。その反復が、演劇に長く接する観客の演劇的記憶として蓄積される。しかし、演劇研究は、そういう現場での快楽を排除し、劇場を訪れる観客の読んでいない戯曲を何度も読み、解釈することに多くは費やされる。

また、演劇を、単独で、周囲の諸現象や周辺のテクノロジーの関連なしに、見ている観客などいない。美術や映画やテレビを見るのと同じ眼で、舞台を見る。それにも拘わらず、従来の演劇研究では、あたかも、戯曲を上演する舞台を見る事だけを自立した価値のように考えて、論じる傾向があった。本論文の特質は、従来の演劇研究に欠落しがちな視覚的な快楽に着目する視点と広い視野を導入するところにも見出される。

本論文では、演劇写真が発生し、展開していく周囲の社会状況にも目配りをして、生動感あふれる描き方をしている。新聞、雑誌の発展、その中の演劇関連記事から広告に至るまで、当時最新のメディアに、テクノロジーとしての写真が入り込んでいく。また、百貨店という、近代産業や都市文化の集積地のような空間にも「演劇写真」が入り込み、演劇写真の展覧が行われる。

それらの、まさに、メディア・ミックスの状況のなかで展開していく、演劇写真による視覚の変貌は、とくに近代化の諸問題や最新のテクノロジーなどには無関心な庶民の眼にも、さりげない日常生活を通して、浸透していったことが感じ取れる。また、それは、俳優の演技にも関連する。観客の欲望の対象である俳優が、その欲望に応えるのは当然だった。映画のクロースアップを知った観客の眼を意識した俳優は、表情術の技術を学ぶ。本論文は演技論にまで及ぶ、広い視野と論点を持っており、演劇文化研究の新局面を切り拓くものであると評価できる。

ただし、論点が広範であるため、些か、各章の繋がりの不足な点は認められる。しかし、それは本論文の価値を損なうものではなく、これからの研究への期待を感じさせる性質のものである。

7　論文の判定

本学位請求論文は，本学学位規程の手続きに従い，審査委員全員による所定の審査及び試験に合格したので，博士（文学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以　上